

〔補説〕名所の歌の解釈として、女性の顔を見たとするのはよみすぎかとも思うが、読む人を楽しませる意図を持って詠んだ歌として、このように解釈してみた。

しかすがのわたり

二六八 ゆきかよふなせはあれどしかすがのわたりはあともなくぞありける

〔語釈〕○しかすがのわたりⅡ愛知県宝飯郡、吉田川の河口にあつた渡し。地名「しかすが」に、そうはいうもののやほりの意を掛ける。○ふなせⅡ舟の停泊所。

〔現代語訳〕 しかすがの渡

行き来する舟の舟泊まりはみえるけれど、あの有名な志加須賀の渡は、今では跡形もなくなってしまったことよ。

〔補説〕舟をつなぎ止める所はあるが、渡しではないということか。この障子の歌では、能宣「行きさして我返らめやしかがの渡りここのものうかるらむ（一九〇）」・兼澄「思ひたち急ぎ来しかどしかすがの渡にきてぞ今は恋ひしき（二二四）」ともに、しかすがの渡での逡巡する旅人の思いを詠んでいる。順の歌は、失われた有名な渡しに年月の流れに寄せる感慨を詠むが、単なる事実報告になってしまった面は否めない。

藤大納言家の障子の絵に添えた順の歌を他の三人の歌と比較してみると、順の特徴として祝意に乏しいことがあげられる。順は、「八十島」で不遇の嘆きを訴えた。同じ題での能宣の歌「八十島のちちのいろいろ咲く花を万世の春君のみぞみむ」が、家の主である為光の長寿と栄華を称えるのとは対照的である。また「浮島」では、

能宣は「わたつみの底に根ざさぬ浮島は亀の背中につめる塵かも」と蓬萊山と結びつけて詠み、元輔は「うきしまの松の緑を見渡せば千歳の春ぞ霞みそめける」と長久の栄えを詠む。しかし、順は人の心の移ろいやすさを嘆いてみせる。詠歌の依頼が順だけ異なったわけではないであろう。作歌姿勢が異なっているのである。能宣や元輔、兼澄らは依頼主の意向と障子の置かれる状況を考慮した結果、多くの歌に祝意を込めた。新築の邸の障子の歌であればなおさらであつたろう。しかし、順はそのようには考えなかった。全体を祝意を込めて作らなければならないと考えていたならば、順もそれなりの歌を詠んだであろう。少なくとも、「八十島」のような歌を入れるはずはない。順は意図的に不遇感を詠んだのである。沈淪は詠歌の主要なテーマの一つであり、能宣や元輔にもそれらの嘆きの歌がある。しかし、彼らはここでは歌わなかった。依頼された詠歌の場における能宣や元輔の配慮は、むしろ当然であつたろう。元輔らは場面によってテーマを使い分けたのに対し、順はあえて沈淪というテーマをこの場にも持ち込んだのである。これは歌人順の意思の反映であり、彼の詠歌に対する考え方が他の歌人たちとは異なっていることを示すものといえよう。

す。順は不遇に沈む自らを「春のいたらぬ」ものとし、他にも同様の人があるかを問うたのである。実際にはどれほど多くの島があるかと春は平等に訪れるわけであるから、順は己れ一人が不平等にも不遇に沈んだままだと訴えたことになる。

うきしま

二六四 定なき人の心にくらぶればただうき島は名のみなりけり
 「語釈」○うきしま＝浮いている島。宮城県松島湾の島。「憂き」をかける。

〔現代語訳〕 浮島

うつろいやすい人の心に比べると、「憂き」思いをさせそうないかにも頼りにならない名を持つ浮島は名前だけで、ずっと頼み甲斐のあるものだったよ。

たかさご

二六五 うちよする浪とをのへの松風とこゑたかさごやいづれなるらん

「語釈」○高砂＝兵庫県高砂市。「かくしつ夜をやつくさむ高砂の尾上に立てる松ならなくに」（古今集九〇八）。高砂の松を詠んだ例が多い。「高砂」に、声が「高」しを掛ける。

〔現代語訳〕 高砂

打ち寄せる波と尾上の松を渡る風と、この高砂の地で高く響くのはいったいどちらの声だろうか。

たごの浦

二六六 春くればたごのうら浪うらよくて出でまさりけりあまのつ

り舟

「語釈」○たごのうら波＝田子の浦に打ち寄せる波。田子の浦は、静岡県富士市の海岸。○うら＝田子の「浦」と「占」の掛詞。

〔現代語訳〕 田子の浦

春が来ると田子の浦に波が立って美しいなあ。占も良いとみて、大漁を期待して今日は一段と多くの海人の釣り舟が出ているよ。

「補説」「するがなる田子の浦波たたぬ日はあれども君を恋ひぬ日はなし」（古今集四八九）のように、田子の浦はよく浦波とともに詠まれる。能宣も、この障子の歌で「あづまぢの田子の浦波春たてば岸の上に咲く花かとぞみる（二八六）」と詠んでいる。順は、同じ「浦波」の語を用いながら、大漁の「占」に掛け、釣りの舟の多く浮かぶ春の海の景色を描いた。体験を感じさせる歌である。

おほよど

二六七 いせのあまにとひはきかねど大淀のはまのみるめはしるくぞ有りける

「語釈」おほよど＝大淀。三重県多気郡明和町大淀。○いせのあま＝伊勢の海人。「伊勢の海人の朝な朝なにかづくてふみるめに人をあくよしもがな」（古今集恋四 六八三）○みるめ＝海松布。ミル科の海藻。「見る目」（外見・容貌・逢うことの意）の掛詞。

〔現代語訳〕 大淀

伊勢の海人に尋ねたりはしないけれど、大淀の浜の海松がどこにあるかははっきりわかるよ。（誰にも聞かないけれど、あの人の顔ははっきり見ちゃったよ）

る意の掛詞。「鏡」「影」は縁語。

〔現代語訳〕永観元年、一条藤大納言の家で、寝殿の障子に諸国の名所を絵に描いたものに添えた歌

夏 鏡の山

鏡という名を持っているから曇らないのだなあ、この鏡山は。なるほど夏の光を浴びてくつきりとその姿を現しているよ。

〔補説〕「名にし負へば」は「くもらざりけり」にかかるのとるべきであろうが、「鏡」はむしろ曇るともいえ、このつながりは不適切である。順は、「鏡」即光り輝いている状態を思い浮かべた結果、くつきりとした姿に結びつけたものであろうか。「夏のかげ」は夏の木陰をいうのが普通であるが、この場合適さない。ここでは、夏の強い光を受けた鏡山の姿を指すと解釈した。『能宣集』の歌「散りかかる花なき夏は鏡山のどけきかげぞまさるべらなる（一八九）」は、「ちりかかる花」がない夏は鏡山の姿がのどかに見えるという意味で、「ちりかかる」春の「かげ」に対して「夏のかげ」を意識している点、順の歌と通じるものがある。

秋 大井がは

二六一 大井川そまにあき風さむければたつ岩浪も雪とこそ見れ
〔語釈〕○大井川Ⅱ大堰川。京都市西京区の嵐山付近。○そまⅡ杣山。材木を切り出すための山。材木。大井川は、材木を筏に組んで流しており、大井川の歌には筏や樽を詠むことが多い。

〔現代語訳〕 秋 大井川

材木を筏に組んで流す大井川、そこに吹く秋風が寒いので、岸の岩に碎ける波もまるで雪とばかりに思われることよ。

〔補説〕大井川は紅葉の名所として知られ、この障子の歌でも他の

三人は紅葉を詠んでいる。順のみ趣をことにし、「秋風」を用いながら冬を思わせる歌となった。

あまのはしだて

二六二 みつ塩ものぼりかねてぞかへるらし名にさへ高きあまのはし立

〔語釈〕○あまのはしだてⅡ天橋立。京都府宮津市宮津湾の西岸江尻から、対岸の文殊に向かって、南西に伸びた長さ二・二キロメートルの砂州。

〔現代語訳〕 天橋立

満ちてくる潮も上りきることができずにそのまま返ってしまいうようだ。さすがに評判までもが高い天橋立よ。

〔補説〕地形として高い意と、名高い意とをかけた。

八十島

二六三 やそ島をまことにいかでみてしかな春のいたらぬうらはありやと

〔語釈〕○八十島Ⅱ「八十」は数の多い状態を表す語。多くの島。○てしかなⅡ終助詞「てしか」＋詠嘆の終助詞「な」。～したいものだなあ。

〔現代語訳〕 八十島

このたくさん島の島々すべてを、なんとかして確かめたいものだ。これらの島の中に、いったい春の来ない浦があるだろうか。

〔補説〕「春」は、「光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思ひもなし（古今集九六七）」のように人生における栄華を指

八十島	春	八十島歌欠	八十島の春	夏	鏡の山
浮島	春	浮島	浮島の春		しかすが
	秋	佐保山	佐保山の秋	秋	宇治
高砂	冬	高砂	高砂の冬		大井河
田子の浦			田子の浦 春		佐保山
	詞書ナシ		こゆるぎの磯の春	冬	住吉
大淀	春	大淀			天の橋立
しかすがの渡			しかすがの渡の夏		高砂

詠歌および題は『能宣集』の十四がもつとも多く、『順集』の九がもつとも少ない。題の順序をみると、『順集』『元輔集』『兼澄集』は詠歌のないものを飛ばしていつて完全に一致する。『能宣集』は、一見して明らかなように季節によって分類されており、他の三集に見える題を季節ごとに順に取り出して並べると、「天橋立」を除いて一致する。「天橋立」の位置のずれは、季節が異なることによるものである。この歌の季節は『順集』中歌も含めて特定できず、詞書には『元輔集』は春、『能宣集』は冬とあるが、詠進時もしくは家集編纂段階での錯誤があったのかもしれない。「天橋立」以外は、『能宣集』は他の三集の歌順をもとにまとめたものといえ、この障子の歌の歌順は完全に一致するのである。つまり、四人の歌人は、最多十四の題を同じ順に示されて詠歌を求められたと考えられる。名所を描いた屏風絵に歌を詠んだ同じころの例は、村上帝の御屏風の歌として『中務集』『信明集』に、大入道殿御賀の御屏風の歌として『兼盛集』にみえる。題に挙げられた地名では、村上帝の御屏風には「さほやま」「しかすがのわたり」「うきしま」が入り、大入道殿の御屏風には「しかすがのわたり」が入っているが、ほかは異

なっている。

源順は、『三十六人歌仙伝』によれば天元二年（979）に能登守に任じられ、永観元年に卒している。つまり、この障子歌詠進は能登守の任を終えた直後のことであり、順の亡くなる年のできごとであった。八月であれば、順は京都に帰って落ち着いたころと思われる。順と為光との特別な関係を示す資料はないが、順は源高明のもとに親しく出入りしており、為光は高明女の生んだ為明親王の家司であったから、なんらかのつながりはあったであろう。安和の変によって唯一の後援者ともいえる高明を失った順にとって、為光は支援を期待したい有力貴族であったと思われる。

永観元年、一条の藤大納言のいへの寝殿の障子に、国々の名あるところを、ゑにかけるに、つくるうた

夏 かがみの山

二六〇 名にしおへばくもらざりけりかがみ山むべこそなつのかげにみえけれ

〔語釈〕○永観元年＝西暦九八三年。○一条藤大納言＝藤原為光。

正暦三年薨、年五十一。贈正一位、太政大臣。○寝殿＝邸宅の正殿。○障子＝室内の仕切りに建てる建具の総称。襖障子。細い木で骨を組み、その骨の両面から紙または布を貼った障子。○名あるところ＝評判の高いところ。名所。○かがみの山＝滋賀県蒲生郡竜王町と野洲郡夜須町との境にある山。○なにしおへば＝名として持っているから。「名にしおへばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと（古今、四一一）」○くもらざりけり＝「くもる」は、雲が空を覆う意と、鏡が物をはつきり映さなくな

源順集「藤大納言家障子の歌」注釈

この歌群は、国歌大観番号260～268の九首である。同じ折の詠と思われる歌が、『元輔集』（98～108）『能宣集』（183～196）『兼澄集』（113～124）にある。次に、それらの家集における詞書を掲げる。

順集 永観元年、一条の藤大納言のいへの寝殿の障子に、国々の名あるところを、ゑにかけるに、つくるうた

元輔集 永観元年八月ついたちころ、一条の大納言の家の障子の歌

能宣集 一条の太政大臣の家の障子の絵、国々の名ある所々をかかせ侍りて、人々歌よみてつけよ、と侍りしかば、よみてたてまつりし

兼澄集 一条どののみさうじにゑに人々歌よみ侍りしに

これらの詞書により、永観元年八月、日ころ、一条藤大納言家の寝殿の障子に国々の名所を描いた絵を描き、それに合わせて歌を詠ませたものであることがわかる。各家集とも、題は地名あるいはそれに季節を加えたものであり、詞書に説明を記す必要があるような特殊な光景をふまえた詠歌とは思われない。取り上げられた地名に新奇な景勝の地といったものは見えず、名だけでその景色が浮かぶような場所である。即ち、必ずしも絵を見なければ詠めないもので

はない。後に記すように各家集とも歌順は一致しており、歌人たちは実際の絵は見ず、与えられた歌題に従って詠んだものではないだろうか。

一条藤大納言とは、藤原為光である。藤原師輔の九男、母は醍醐天皇皇女雅子内親王である。彼が大納言に任じられたのが貞元二年（977）四月二十四日、以後寛和二年（986）七月二十日に右大臣に昇進するまでの十年間が大納言であった期間である。永観元年（983）当時、為光は四十二歳であった。この年七月五日に一條邸は火災によつて焼失しており、再建に伴う詠進であろうと増淵勝一氏は言われる。『元輔集』の詞書の「八月、日ころ」と時期的に照応する。四つの家集にみえる歌題を、各家集における歌順に示すと、次のようになる。

原田真理

順集	元輔集	兼澄集	能宣集
夏 鏡の山	春 浜名の橋	浜名の橋 春	はまの橋 春
秋 宇治	鏡の山 夏	鏡の山 夏	八十島
冬 住吉	宇治 秋	宇治 秋	浮島
大井川	大井川	住吉 冬	田子の浦
大井川	大井川	大井の秋	こゆるぎ
天の橋立	春 天の橋立		大淀